

はじめに

近年ではスポーツの世界においても、ダイバシティ&インクルージョンの議論が盛んになっている。しかし、ダイバシティとは何か？どのようにインクルージョンが進むのか？という、基礎的な疑問にシンプルに回答するのは意外と難しい。読者の方々は、どのようなご意見をお持ちであろうか。本号は、こうしたシンプルな問いを深めていくうえで、ひとつの教材のような存在になってくれるのではないかと期待している。

冒頭には、本研究グループの外部者による講演およびそれを元にした論文の2編をそろえた。最初は、コーネル大学のグラント・ファレド教授の論文である。この論文では、アメリカでマイノリティがいかに民主主義や資本主義といった制度によって攻撃され、またマイノリティがそれにいかに抗おうとしているかを、著名な黒人スポーツ選手の動向を軸にオリジナルな解釈で描き出し、持続的な政治経済制度を、コロナ禍にアメリカのプロスポーツで感染防止策としてとられた「バブル」を基にして考察している。

続いては、本学社会学研究科の寺尾智史教授の講演である。この講演では、ポルトガルの、ある地方の民族文化であるパウリティロシュがどのようなものか、それが政治的に文化活動として扱われるようになった過程、そしてそれはスポーツなのかどうかをカポイエラとの比較から考察している。パウリティロシュについては、本文中で解説される「Assalto a castielho」をインターネットでは是非検索頂き、ご自身の目でどのようなものか確かめて頂きたい。これに近いものとしては、チアリーディングが挙げられると思われる。スポーツ社会学的な議論ではなく言語学的な考察をベースにしている点も、我々にとつてとても興味深い。

その後が続くのは、茨城大学の中嶋哲也准教授による論文である。戦後、古武道はスポーツであるとの認識が政府レベルでも普及するなか、武道はスポーツではなく、だから古武道もスポーツではないと主張する古武道界が、古武道の定義や意義をどのように構築しようとしたのか、を歴史的に明らかにしている。

最後に研究ノートが3編続く。著者3名はいずれも、当研究グループで院生生活を送ったメンバーである。まず中村英仁氏は、陸上競技のローカルなアマチュア大会であるが、3万人の観客動員を過去に記録した、「ゴールデンゲーム in のべおか」の組織力に関する事例をレポートしている。次に山本夏生氏は、スポーツ報道の制作者に焦点を当て、彼らが何に価値を置いていたのか、また選手の家族などとの人間ドラマが描かれるようになったのはなぜかといった問題を歴史的に追跡している。最後に川田幸生氏は、2020東京オリパラを機に、障がい者との交流、理解促進、スポーツ活動の機会が得られたと東京都により報告がなされているが、どこまで、どのようにそこから共生社会の実現ができていたのか、を考えるためにはどのような社会科学的な問いがふさわしいのかを考察している。

いずれの論稿も、マイノリティ（少数の意見、という状況も含む）とは何か、ダイバシティとは何か、どのようにインクルージョンが実現できるのか、等についてより深く考えていくための貴重な材料を提供してくれている。ぜひ楽しんで頂きたい。

2024年2月28日

一橋大学スポーツ科学研究室室長 中村 英仁